

アクティブ・ラーニングとしての「異文化体験」： 初年度授業報告

“Experience Other Cultures” as Active Learning

茶谷 薫 *Kaoru Chatani*

(芸術学部)

授業「異文化体験」とは

2017 (H29) 年度、名古屋芸術大学では、音楽および美術、デザインの三学部が、一学部一学科の芸術学部芸術学科に統合された。三つの学部は、各々「領域」となり、芸術教養領域が新たに加わり、芸術学部の構成は四領域となった。芸術教養領域は、音楽家やアーティスト、デザイナーなど、演奏者や作り手側を養成するのではなく、芸術を含む幅広い知識と、演奏者や作り手側をサポートしたり、プロモートしたり、企業でメセナを運営したりする力を身につけた、ジェネラリストを養成することを教育目標としている。

そのため、芸術教養領域では、それに関わる幾つかの独自科目を開講することとなった。その一つが「異文化体験」で、筆者が担当教員となった。本稿は2017年度前期に実施した初年度授業の内容および学生の活動、それらの考察である。

「異文化体験」は毎週決まった曜日・時限に行う授業ではなく、土日や長期休暇期間などを利用し、集中で開講する形式である。また、講義もあるが、学外へ出掛け、見学と調査を行い、発表をすることが主である。これは、美術やデザインなど、自己の発想力が重要視される実技中心の領域と同様、自身で考え、動く力を養いたいという、芸術教養領域の教育目標を考えてのことである。また、このような形式は、当然のことながら、アクティブ・ラーニング型の授業として展開できる。以上のことを念頭に置き、当該年度の講義要綱(シラバス)に示した「授業の到達目標およびテーマ」は、「文化的背景の異なる人々と、彼らの生活を理解することは、これからの社会では必要不可欠である。何故ならば善悪正邪は別として、インターネットは社会から無くならず、グローバル化は当分の間、進むであろうからだ。また同じ国、民族に属していても、世代間ギャップは無視できず、地域差も在り続けるであろう。本科目では国内外の文化的背景の異なる地域を観察・分析し、ディスカッションを行い、レポートすることを通じ、自分自身を客観視し、視野を広げることを目的とする。」とした。ただし、日程と費用の制約があり、海外ではなく、国内、特に大学近郊の幾つかの地域を観察、分析することになった。具体的な地域等は後述する。

ところで、入学したばかりの大学生の多くは、小中学校や高等学校、自身の家の近くや、家族や学校で赴く、大人に決められたコースを辿る旅行での体験しかない。本科目

「異文化体験」の究極の目的は、様々な文化を知ることによって視野を広げ、自身を客観的に分析することである。大学生に限らず、社会人であっても、自身の地域のことや、その地域文化のことを、意識し生活する者は極めて稀である。その意識を持つためには、身近な地域の現在の姿だけではなく、過去の歴史を知ることが重要である。加えて、文化といえは、一般には美術や音楽など、高尚とされるものを思い浮かべられがちだが、そのようなものだけではない。低俗とされるものもある。何より、物の考え方や見方、感じ方など、目に映りにくいものこそが重要である。このことを学んでもらおうと意識し、学外授業の地域などを選定した。

これらのことを実際の授業に落とし込み、講義要綱の「授業の概要」として、「学期のはじめにオリエンテーションを行い、履修学生が自己の出身地等、文化的な背景を説明し、ディスカッションを行う。その上で、学生の触れていない文化、地域を国内外から選定する。その場所へ日帰りもしくは宿泊旅行し、人々の行動や生活、それに関わる物品・建物・道路・田畑・山林・河川・湖沼・海などを観察した上で分析を行う。その結果を報告し合った上で、ディスカッションを行う。また授業の性格上、余りにも人数が多いと不可能なため、25人程度を上限とする。」と記した。

加えて、「授業時間外の学習」として挙げたのは、「自身の出身地や出身校（保育所や幼稚園、小学校、中学校を含む）について調べてくること。家庭の文化的背景について家族・親族の話をよく思い出し、不明点は尋ねておくこと。また調査地の希望があればその場所の簡単な紹介と、希望する理由を明確に他者へ説明できるようにしておくこと。フィールド調査前には当該地について書籍等で調べる。それぞれの予習は90分以上行うことが望ましい。」であった。成績評価は、口頭発表やディスカッション、授業担当者を含む他者の発言についてのコメント、文章を中心にして作成するレポートによって行われた。また教科書は特に指定しなかった。

2017年度実施内容

以下、授業内容の小項目毎に分けて報告する。

リトルワールド

名古屋芸術大学では他の多くの大学同様、新入生のオリエンテーションや親睦を兼ねた行事を始めて久しい。2017年度は、各学部・領域や、各領域の下に位置付けられている複数のコース毎に、日帰り、もしくは宿泊を伴った、フレッシュマン・キャンプ（オリエンテーション合宿）と名付けられた行事があった。行き先や日時は、そのコースや領域がそれぞれ計画し、グループ毎に異なっていた。芸術教養領域では、4/15(土)に、愛知県と岐阜県の境にある、野外民族博物館リトルワールド（以下、リトルワールド）で実施した。教職員が、新入生四名と、留学生の研究生一名を引率した。日程と予算の都合によ

り、これを「異文化体験」の初回の授業と兼ねることとした。

出発前、大学に集合した同領域の学生と教職員に、筆者がリトルワールドに関する一般的な情報をまとめたレジュメを配布し、簡単な説明をした。この時に、「リトルワールドには様々な民族の建物や衣装などが多数展示されているが、「無い」ものは何か、を考えながら、見学するように」と課題を出した。また、入園直後にオリエンテーションを10分間ほど行った後、昼食時の点呼、夕方に帰る直前の点呼以外は、自由に行動させることとした。

翌週の4/22(土)には、学生四名と筆者のみが集まり、前週のリトルワールドで出した課題について考えたことを発表させた。学生は興味深い観察結果を発表したが、筆者が考えた答えと同じ意見は出なかった。

「文化」の意味

同日、リトルワールドの発表をさせた後は、「自身の出身地と自己の文化的背景」について説明させた。学生の多くは、「文化」と聞くと、アートや音楽や書道など、狭義の芸術分野のことを連想する。そこで、まずは文化の広い意味を知ってもらうため、何の注釈も入れず、上記の題を与えた。

予想通り学生は、出身地を簡単に述べた後、自身が音楽や美術や書道などの学校外の教室に通った話や、学校の中での合唱会や文化祭などについて話すのみであった。そこで、文化はもっと広い意味があることについて説明した。

また、この時に使用した教室は、通常の机と椅子が並んでいる講義室でもゼミ室でもなく、学内に設置された、育児支援用の、幼稚園や保育所のような作りで、なおかつ幼児用の玩具が多数配置された場であった。土足は禁止、床暖房があり、背の低い椅子や、積み木のようなパーツを組み合わせて椅子・机にできるもの、外には砂場と浅いプールが備えられているという特徴もある。

これは学生が子どもの頃を思い出し、子ども時代の文化的環境に思いを馳せて貰うと同時に、幼児が如何に小さく、低いものを使う体をしているか、などについても実感して欲しいと考えてのことである。

昭和日常博物館

春の大型連休明けで、新入生も大学に慣れてくるであろう5/13(土)、北名古屋市立歴史民俗資料館の見学と、振り返り授業を行った。学生と筆者は、午前9時半に当館に集合した。筆者が簡単なガイダンスを行い、博物館内の一角で、筆者が簡単な発表の例を見せた後、解散し、館内を自由に見学させた。上記の発表例は、与えた課題の例である。学生は約2時間後に集合し、筆者の発表の例のように、同館が展示している物や、それに関する別のことについて、当該展示物の前で短いレクチャーを行う課題であった。

当館は別名「昭和日常博物館」とも称され、昭和時代の中でも、特に経済成長が著しい、昭和30～50年代を中心とした様々な日常物が収蔵・展示されている¹⁾。また、博物館施設としては、最初期から回想法を行っていることで知られる²⁾。所蔵物は、日本各地から寄贈された、ドロップの缶や、牛乳瓶といった飲食物の容器から、教科書や雑誌などの書籍類、ラジオやテレビ、テープレコーダー、レコード再生機、電動の洗濯機、電気炊飯器、といった電化製品、ソファや筆筒などの家具類のほか、大きな物から小さな物までが揃えられている。この授業の前年には、昭和時代の自家用車が多数寄贈され、当館と図書館との合同の建物の地下にある駐車場の約半分を区切り、自動車や自動二輪車などが展示されるようになった。学生は3階にある主たる展示室、2階に設置されたケース付き展示台、地階にある自動車展示場を自由に移動し、見学した。その際は、友人に頼ることのないよう、単独で見学するよう指示した。筆者も学生の様子を見るため、館内を巡回した。

11時半過ぎに集合した後、学生が一人ずつ、自身の決めた展示場所に残りの学生と筆者を連れて行き、彼らなりの説明を行った。三名の学生は特定の一箇所のみで、それぞれ5分間程度の説明を行ったが、残り一名は五箇所も場所を変え、計20分以上の説明を行った。非常に力の入ったものであった。立ち疲れた学生からは苦情が出たものの、動線を工夫する余地があるのみで、内容も大変優れていた。

正午過ぎに、一旦解散し、3時限目の始まる頃に、大学の教室に集合し、振り返り授業を行うこととなった。当館は大学の集合場所とは約1km離れている。移動と昼食の時間を考慮し、その時間設定をした。

教室に集合した後は、北名古屋市歴史民俗資料館を見学先の一つとした理由を推測、発表させた。続けて、昭和時代、特に戦後から高度経済成長期の文化的な変化、人口が多い年代、所謂団塊の世代及び、団塊ジュニア世代の意味、丙午の迷信と一時的な人口減少などについて説明した。これは見学先として同館を選定した理由の説明ともなる。

更に、同館が当時の館長である市橋芳則氏により、どのような変遷と発展を遂げてきたか、学芸員の仕事内容やその手腕などについて解説した。また、真摯に授業と実習に取り組めば、学芸員の資格は得られるが、学芸員として正式採用される道は非常に限定的であるという厳しい現実についても伝えた。

ところで、授業中、非常に興味深いことがあったため、ここに記す。高校三年間の学習を終えた直後の（つまり浪人や社会人の経験をしないまま）平成29年に、大学生となった受講生四名の親が生まれ、成長期を過ごしたのは、ほぼ確実に昭和時代である。しかし、学生全員が、親が昭和生まれであることを意識せず、無論、正確な生年も知らなかった。親の誕生日は知っており、誕生会で祝うにもかかわらず、親が何歳であるか、ということは考えもしないことに、筆者は驚愕させられた。例外的に一名の学生は、2020年の東京五輪の特集番組を家族で観ていた際に、前回の東京五輪が昭和39年に開催されたという情報を知り、それが父親の誕生年だと教えられたという。ただし、母親の年齢は知ら

ない様子であった。後日、他の学生や20代の人々に尋ねたところ、親の年齢や生年を知らない人が意外にも多く、筆者は再び大変驚かされた。

満洲写真全史展

三回目の学外授業は、6/25(日)9時半に名古屋市美術館に集合し、当時開催中だった「異郷のモダニズム—満洲写真全史—」を観覧することから始めた。終了後は、大須観音と大須商店街での観察をしたが、これについては次項で述べる。

「異郷のモダニズム」展では、日本が清朝最後の皇帝だった満洲族の溥儀を執政、皇帝とした満洲国の様々な風景や人物を撮影した写真が、解説とともに展示されていた。満洲国には様々な批判がある。例えば、五族協和政策の名のもと、実質的には差別があったことや、日本人の山口淑子が、李香蘭という名の中国人として融和政策に利用された、ということを含めてである。一方、森繁久彌の活躍や、特急あじあ号を擁した満洲鉄道、その調査部、映画製作会社（満映）、新京（長春）の都市計画など、現代の日本社会にも繋がる様々な文化が発達し、先進的な政策が執られた場ともなった³⁾。このことは、前項の昭和時代の社会と文化を知ることに繋がる。

また会場の名古屋市美術館や、県内の幾つかの博物館施設には、名古屋芸術大学の学生証や職員証を提示すれば、無料で入館できる。このメンバーシップ制度について知らしめ、以降の利用を促すことも、当館で観覧させた目的の一つであった。

名古屋城下南の寺院群

前項の展覧会の後は、地下鉄駅で一駅足らず南にある、大須観音と大須商店街に、そのまま徒歩で移動した。途中、学生も支払える安い定食屋で昼食を摂りながら、展覧会と美術館の振り返りを行った。

大須観音は、愛知県名古屋市中区大須にあり、地名や地下鉄駅の名称にもなっている。本稿執筆時の名古屋市では巷間知られる「大須商店街」を、門前町として擁する。大須観音は真言宗智山派の本山で、正式には北野山真福寺宝生院という。古事記の最古写本など、貴重な古文書を多数蔵した真福寺文庫がある⁴⁾。加えて、近代に入り、大正琴という楽器ができたが、その発祥地の碑も境内に存在する。

大須観音の起源は、現在の岐阜県と愛知県の県境となる木曾川流域の、尾張國中島郡である。そこに12世紀末、中島観音が祀られ、後醍醐天皇が14世紀前半に北野山満宮を創建し、この別当寺として、その約十年後に創建されたのが真福寺の始まりであった。後村上天皇により伽藍が建立されて勅願寺となった。戦国期には織田信長の寺領寄進も受けている。17世紀初めの慶長年間、名古屋城の築城や清須越しなどの「都市計画」をした徳川家康の命により、中島郡から、名古屋城の約5km真南に位置する現在の場所に移転された。これを実行した責任者が、犬山城主で尾張藩の附家老となった成瀬正茂である⁵⁾。

この大須観音から約500m東にあり、大須商店街の中に入り込む形となった万松寺（萬松寺）も、織田信長の父・信秀により織田家の菩提寺として造られた。ただし、大須観音同様、元来は別の場所にあった。その地は現在の名古屋城から1kmほど南だったが、家康の命で現在地に移転された。大須商店街の南には東別院や西別院と称される浄土真宗の大きな寺院などが多数集まっている。大須商店街は、大須観音に限らず、これら多くの寺の参詣客が集まる場所として発展した。日本各地には、大きな寺や神社の周辺に形成された門前町がある。現在の繁華街や観光名所にも発展したところも少なくない。この端的な例を学生が知るため、大須観音を学外授業先とした。商店街については次項で述べる。

大須商店街

前項で記したように、大須商店街は、その名の通り、大須観音近くに発展した大きく長いアーケードを擁する商店街である。第二次世界大戦の空襲に遭うまでは、大須で最も栄えた寺は七寺（ななつでら）であった。それは空襲で焼失し、再建されないまま、演劇を中心とするイベントを行う場としての、「七ツ寺共同スタジオ」などに名称を残すのみである。

現在の名古屋市中区の住所表記では、大須の東部、上前津の西部、橋、門前町は、江戸期において、その辺りに集められた寺院群と、その門前町として、参詣客を集め、彼らのための店で賑わった。門前町には付き物の遊郭が、現在の同市中村区へ移されたものの、大須は近代化以降も賑わい続け、空襲で焼失した後も商店街はあり続けた。その一つが東京の秋葉原のような電気街としての貌である。

名古屋市内では1970年代前半に市電が廃止され、それに伴い、人の流れも変わり、円頓寺商店街など多くの商店街が寂れることとなった。大須も寂れた商店街の一つだったが、地元の大学や、商店主たちの様々な工夫と努力により、現在は地域住民だけではなく、他の地方の日本人や外国人の観光客も大勢訪れる場として栄えている。

授業では、大須観音の境内で以上のことを学生へ簡単に説明した後、個々人の視点で、人や物や店などを数えるフィールドワークを行わせた。2時間ほど自由行動とした後、同じ場所に戻らせ、点呼を取り、解散した。

この定量的観察の結果は、7/3(月)に大学の教室にて発表させた。主に口頭発表だが、カウントした結果のグラフはパソコンで作るよう指示した。その課題は3名の学生が行ってきた。残り1名はパソコンに慣れておらず、グラフは手書きであった。定量的な社会調査やグラフ作成は卒業研究や、それ以前の様々な授業、就職後も必要な力であるため、まずは容易な内容で課すことにしたのである。また、対象を学生自身が選定した定量的な調査は、学生にとり、ほぼ初めてであるため、発表後には、デザイン学部のデザインマネジメントコースに属する上級生が、大須商店街を調査した結果をまとめた冊子（嶋村博氏が指導教員）を見せ、自他の結果の差を感じさせ、姫路市での調査の意欲を伸ばすようにした。

青春18きっぷ

学外授業としての最後の回は、宿泊して、密にフィールドワークをすることとしていた。学生と日程調整をし、9/7(木)から9/9(土)にかけて、姫路市中心部で、とした。姫路は名古屋から新幹線で向かうのが最速だが、JRの在来線を使っても4～5時間程度である。学生の多くは、長期休暇中に使える、「青春18きっぷ」を知らなかった。また、知っていても、実際に使ったことのない者もいた。青春18きっぷは、鉄道マニアの間のみならず、マニア以外にも広く知られる期間限定の乗車券である。この乗車券を用いることで、鉄道文化の一端を知るのも、様々なことを知らない学生の勉強になるだろうと考えた。これを使って姫路に赴き、鉄道文化について短いレポートも書かせることとした。また、往復の間、学生と議論したり、学生の話の聞いたりすることが、今後の授業及び、学年が進んだ際の卒業研究指導や就職支援などにも役立つと考えられた。

姫路市中心部

上述の通り、二泊三日で、姫路市中心部でフィールドワークを実施することとした。日程調整時、学生から調査希望地を募集したところ、二人から、それぞれ長野県の上田市と軽井沢町の提案があったが、日程と移動時間を勘案し、姫路市の中心部とした。

姫路市は、その名の由来となった姫路城の城下町を中心に発展した兵庫県にある自治体である。数回の市町村合併により、瀬戸内海の家島諸島を含めた市域は広大なものとなった。今回の調査地は、姫路駅と姫路城周辺に広がる、旧来からの市街地である。

国宝にして、ユネスコの世界文化遺産でもある姫路城は、白鷺城の別名で象徴される優美さだけが特徴ではない。対米戦時の姫路空襲でも消失を免れ、市民の復興意欲を喚起したと言われるほど、旧来からの市民にとり、重要な存在であるという。姫路は、瀬戸内の温暖な気候であるとともに、播州灘に面し、海運と漁業でも大変に豊かだった。この城下町の姿は、戦災復興後も残され、観光地としても改めて紹介するまでもなく有名である。姫路城の周辺は大きな姫路公園として整備され、動物園、日本庭園としてデザインされ平成になってから開園された好古園、美術館、県立歴史博物館、日本城郭研究センターなどの文化的、教育的な施設を擁する。

姫路城北東部には戦災を免れた地区があり、敵から姿を隠す工夫を凝らした「のこぎり横丁」の名残が今でも見られる。また駅の北から姫路城の南まで長く広く続くアーケードを持つ商店街が市民や観光客の買物を大きく支えている。

初日は、前項に示した通り、青春18きっぷを用い、名古屋駅を午前11時頃に出発し、東海道本線と山陽本線の車中で説明や雑談をしながら、15時前に姫路駅に到着した。観光案内所で地図などを入手した後、近くに宿泊先として選定したビジネスホテルにチェックインし、各部屋に荷物を置かせた。その後、フロント横に作られた、ビュッフェスタイルの朝食会場として使われている、テーブルと椅子が所狭しと並ぶ自由スペースに集ま

り、姫路調査のスケジュールと目的等について簡単に説明をした。説明後、全員で上記「のこぎり横丁」を観察に行き、姫路城東側を南下し、商店街も観察し、姫路の地理感覚を身につけさせた。そのまま駅ビルの地下街にも続く場所で、明石焼きなどを摂って夕食とした。宿泊先に帰着した後は、前述の自由スペースで振り返りをしながら、21時まで話を続けた。

二日目は、フロントで朝9時に集合し、全員で商店街を北上し、姫路城南東に造園された好古園に向かった。同園見学後は、姫路城の天守閣まで上がった。姫路城は「姫路城大発見アプリ」という名称のスマートフォン用アプリで、AR体験ができるコーナーを幾つも設けている。学生にそれを知らせたところ、筆者同様、自身のスマホにダウンロードし、利用していた。姫路城見学後は全員で昼食を摂り、午後の説明を行い、解散した。姫路城周辺を自由に探索し、晩に観察したことを発表し、後日レポートにまとめさせるためである。筆者も学生の見本となるよう、商店街と駅前の観察とインタビューを行った。

夕刻、時刻通り、姫路駅に集まった学生とともに夕食を摂った。ある学生が事前に調べて提案した、駅構内にある小規模なフードコートで夕食会場とした。そこで、観察したことを発表させ、最終日である翌日のことについて説明した。宿泊先帰着後も自由スペースで振り返りをした後、21時まで雑談した。

最終日は荷物をホテルに預け、姫路公園にある動物園に赴いた。ここは学生の一人の親が、盆暮れの里帰り時に子どもたちを連れてきたところであるという。大人になった目で、それを振り返ることと、姫路城が間近に見える小規模な動物園の、博物館施設としての運営を考えさせることとした。見学後は、学生が提案した、姫路の商店街に設けられた、某キャラクターのカフェに行き、昼食を摂ることとした。そこで、帰路は往路と異なる、山陽本線、東海道本線、大阪環状線、関西本線、つまり奈良県や三重県を通るJR在来線を利用することについて説明した。ところが、ある学生の事情により、その時間的余裕が無くなったため、往路と同じ山陽本線から東海道本線に乗り継ぐ最短路をとることとした。復路は疲れている学生も多く、また土曜日であったためか、往路よりも混んでおり、話をすることが余りできなかった。予定通り夕刻、名古屋駅に到着した後は注意事項を述べて解散した。

まとめの発表

最後は10/16(月)に大学内の教室で、スライドソフトを用いたまとめの口頭発表と、レポートの提出をさせた。レポートテーマは、以下の三つである。一つ目は、姫路以前の、リトルワールド、昭和日常博物館、「満洲写真全史」展と大須観音・大須商店街の日帰り観察と筆者の解説を踏まえ、調査したこと、考えたことである。二つ目は、青春18きっぷを使った旅についての、体験もしくは調査と考察についてである。三つ目として、姫路市内における調査について書くよう指示してあった。後述するよう、学生は筆者の予想を

超えた発表をした。これについては次節に記す。また、学生には個々人の発表に対し、各々のコメントを述べさせた。これは、まだディスカッションと呼べるものではなかったが、論理的で的確な指摘やアドバイスとなる発言もあった。

学生の報告にみる授業理解

本稿で報告する「異文化体験」という授業科目は、筆者の講義や説明やサポートもあったが、実地調査は基本的に学生が自身の発想と行動力で行い、その結果と考察を口頭発表するとともに、文章にまとめる、という流れで、アクティブ・ラーニングの形式を中心として進めた。さて、その結果はどのように表れたであろうか。ここでは最終回のまとめの発表を中心に記す。

まず、自身の文化的背景が、美術や音楽など一般の人が文化だと考える狭い範囲のものではなく、日常を満たす様々な物や物質以外のものであり、自身の考え方を含むすべてを形成してきたものだという理解が進んだ、と全員が発表した。また、自身の暮らしと結びつく事物や考え方が多数あることを実感し、具体的な調査と講義を通し、文化の厚みについて気付いた、と述べた者もいた。異文化とは単純に外国の文化だけではなく、家庭内でも世代の差による文化差があるかもしれない、他の人の文化を知ること、その人のことを理解できる、そして異文化を知ること、自身の文化についても考察できる、と授業で教えたことを、具体例を挙げて、深く理解した形で述べた者もいた。

昭和日常博物館での学びについては、昭和の物がまだ残っている祖父母宅の様子を思い出したり、家族を写したフィルムの動画をデジタル化したりした時のことなど、昭和生まれの親や祖父母がいる家族の思い出を語った者もいた。また、両親や祖父母が若かった時代を考え、自身のルーツを考えるようになった、と述べた学生がいた。その学生は、祖先の一人が某市の名誉市民になったとのことで、彼とその市の歴史について調べ、長く優れたレポートを提出した。「満洲写真全史」展で示された昭和初期から日本の敗戦直後までの昭和時代と、昭和日常博物館の展示物の関係を述べた者もいた。

大須については、初めて訪れた学生も、大学入学前から何度も遊びに来ていた学生もいた。授業で赴いた際が初回だった学生の中には、授業の後、別の友人を誘って再訪し、授業時には気付かなかった様々な物や人の様子に気付いたと述べた者がいた。また、定点で多数の人が行き交う様子を観察し、カウントする調査の煩雑さや困難を学んだ、と話した者もいた。

ここで学生がカウントした対象について概略を述べる。観察時期が春から夏への変わり目の梅雨時ということもあり、半袖の人、帽子を被った人と、服装に関わることを選んだ学生が二名である。また、多くの人が日用品ではない物の買物や、繁華な場を散策で楽しむという場所の特性から、単独者、カップル、三人以上で歩く人の割合に着目した学生もいた。新奇な「グッズ」などを積極的に頒布し、新しい墓地の形の提案もしている万松寺

で、賽銭を払い、頭を垂れる形でお参りに来たり、墓地参りに来たりしている真摯な参詣者がどの程度いるか、について調査した学生もいた。

青春18きっぷを用いた鉄道移動を通して知った、鉄道マニア文化についての報告には、往復路に「鉄道オタク」と呼ばれる人を探し、そのうちの数名について、どのような服装や持ち物、行動かを観察し、報告した者がいた。また、「撮り鉄」と呼ばれる、列車の撮影を志向するマニアの中に、立入禁止区域に入ってまで撮影をする悪質な者がいるが、そのような行為を発生させる環境要因について、他の交通機関との比較を通して考察を行った学生がいた。駅名を記した駅名標などに使われているフォントが、JR 東海と JR 西日本で異なることに気付いた学生は、そのフォントの種類や、どのようにしてそれが使われるようになったかの経緯、同じフォントが使われている他の例について調べ、「文字鉄」と呼ばれる鉄道マニアのジャンルがあることを報告した。また、青春18きっぷが5枚綴りであり、長時間、在来線の普通電車に乗ることについての考察を述べた者もいた。

姫路については、幼少期から親の里帰りに伴い何度も来ていた学生もいれば、修学旅行で城だけ立ち寄った学生、初めてその地に降り立った学生と様々であった。何度も訪れたことのある学生も、商店街や駅の様子は全く知らなかったとのことで、観光地や、祖父母宅のある住宅街とは全く異なる、姫路の別の顔に驚いたとのことであった。特に商店街の広大さと、人出の多さについては、全く知らされていなかったため、これほどの盛り場があるという情報が親戚からもたらされていないことが不思議だと述べていた。

姫路の調査では、女子中高生の制服のスカートの丈が愛知県のそれよりも長く、膝下まである人が大多数であることを報告した学生がいた。この学生は、ファッションに興味があり、事前に兵庫県では自身の暮らした地域とは異なり、長い丈のスカートが可愛いとされている、という情報を得た上で調査をしたとのことだった。

観光地である姫路の交通について調べた学生もいた。当該学生は、具体的には、駅前に到着するタクシーの発着数、スーツケースを持つ歩行者数、観光レンタサイクル、バス、駅から城へ向けて北に伸びる広い道路を整備した背景などについて報告した。特にタクシーは、スーツケースを持つ観光客と思しき人が多かったとのことであった。

別の学生は、事前に姫路市や姫路城について詳細に調べてきており、調査旅行中、筆者が知らないことを幾つか述べた。その一つが、姫路城のアイスクリームの自動販売機の売り上げが日本一である、という情報である。この学生は、これに基づき、姫路城に設置されたアイスクリーム自動販売機のうち一つを観察し、購入した人の数と、何を購入したかを調べた。圧倒的に外国人観光客の購入割合が高く、それも日本でしか売られていないであろう種類のアイスクリームが選ばれ、バニラやチョコレートなど、一般的と思われる種類を外国人客が買うことがなかったという。また、日本人の子どもが親にねだる場面が何度もあったが、ほとんどの親は子どもに買い与えなかったとのことだった。また、この発表をしたスライドはグラフや写真を用い、丹念に準備されたものであった。

別の学生は、姫路市にあるマンホールの蓋の図柄の種類や、それが設置されている地点との関係について述べた。それは、調査旅行出発前に視聴した、別の地域のマンホールについてのテレビ番組からの着想であるとのことだった。当該学生はマンホールの蓋そのものに加え、仕切弁や消火栓についても調査したという。マンホールカードの存在についても述べた。この報告は、カウムの仕方などの調査方法や調査地点について客観的な基準を述べた点、デザインマンホールの設置場所についての考察が、非常に優れていた。

能動的学びの達成度

2017（H29）年度前期に開講された「異文化体験」を受講した学生は、果たして能動的な学びをし、「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力」⁶⁾を養えたのだろうか。

前節に記した通り、特に大須や姫路の現地調査では、学生は自身の力で考え、調査し、考察を行うことができた。独自の優れた発想に基づいた発表や、授業担当者の筆者の想定を超える発表を行った場合も少なくない。以上の点では当該授業で学生は能動的に学んだ、と言っても良いだろう。

ただし、他の学生の発表を踏まえ、自身の考えを深め、相手にも好影響を与え、より良い発表内容に改善していく、というディスカッションはほとんどできなかった。筆者の誘導で互いの発表の感想を無難に述べるのみで終始した。これは、筆者の指導力不足でもあり、学生の未熟さでもあろう。

本稿執筆中の現段階で、当該四名の学生は、二年次に在籍し、その年度前期の授業を終えている。後期も含め、グループワークを含めた授業を幾つか受講していることとなる。翌年度以降もまた、そのような授業が複数開講される見込みである。彼らにとり、大学生としての学びの最終的な仕上げは、卒業研究とそれを論文にまとめることにある。IoTやAI、ドローン技術の発達などにより、大きく変化し続ける社会では、将来像が見通せない。彼らに限らず、我々全体が、個々に身につけた力を、自身が生きるためのみならず、他者や社会のために活かす必要がある。アクティブ・ラーニングはそのような社会の変化を想定して提唱された学修方法である。この「異文化体験」という授業を一つの礎石として、学生が自身を伸ばしていくことができるか、今後も注視し、これを含む、筆者の担当科目全てでも改善し続ける必要がある。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、名古屋芸術大学の教員および助手、事務職員の方々にご示唆を頂いた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝する。何より学生の積極的な授業参加や意欲的なレポート提出が、本稿執筆の原動力となった。

文献および註

- 1) 北名古屋市歴史民俗資料館 昭和日常博物館、<http://www.city.kitanagoya.lg.jp/rekimin/index.php>、北名古屋市 WEB サイト
- 2) 北名古屋市の回想法、<http://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000071.php>、北名古屋市高齢福祉課 WEB サイト
- 3) 森島守人、1991、陰謀・暗殺・軍刀 一外交官の回想、岩波書店；山口淑子、藤原作弥、1987、李香蘭・私の半生、新潮社（1991年に文庫化）；浅野豊美、2008、帝国日本の植民地法制 法域統合と帝国秩序、名古屋大学出版会、他多数
- 4) 阿部泰郎、名古屋市博物館、2012、大須観音—いま開かれる、奇跡の文庫—、大須観音宝生院、あるむ
- 5) 鈴木快聖、1954、大須観音真福寺略史、浜島書店
- 6) 文部科学省中央教育審議会、2012、新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—（答申）